

I. 知 床 半 島

1. 知床半島行 昭和37年春（第一次）

梶本，堀

3月8日(木) 晴のち曇り

5日「日本海」青森行にて出発。正味3日間汽車の旅の後、今日根室標津に着く。

標津より増発してくれた羅臼行バスに乗り込み 12時頃羅臼に着く。早速役場の山岳会会長さん、現地連絡本部の小野塚さんに連絡をとり病院の車を借用し荷物をB.H.羅臼温泉に運び荷物の整理をする。B.H.は、羅臼から羅臼川に沿って一時間位の奥に入った質素な所にあり羅臼町民の共同浴場になっている。

3月9日(金) 晴のち曇

3名が偵察に出る。B.H.から羅臼川に沿って進み一息峠の下に出る。晴れているのでとても暑い。雪はくさりワッパはすぐだんごになってしまい、ストックで払い落としながら進む。

ここから小さな尾根にとっつき、一息峠に出て里見台に出る。名前のごとく展望がきき流水がよく見える。反対の西側には羅臼岳の頭が顔をのぞかせている。第一の壁第二の壁を偵察し、ここで昼食。偵察の結果、ラッセルはたいしたことはないようだが第一の壁から森林地帯まで、尾根の腹をまかねばならないのがやっかいそうだ。(9:30 B.H.出発 - 9:40 登山口 - 10:00 一息峠 - 10:45 里見台 - 12:00 第二の壁 - 14:15 B.H.着)

3月10日(土) 晴のち風雪

天候は、すこぶるよい。C.I.までのデボを目的として出発。一息峠と里見台の間より出ている小さな尾根よりとっつく。ようやくのことで里見台で一息つく。天候は、悪化しガスと共に雪もでてきたので急いで出発。はい松群が顔を出している所よりルートは左の森林地帯に入らねばならないのに右へ右へとガスのため進んでしまう。一休みして第一の壁を捜し急斜面を左へトラバースし第一の壁に出る。そこより尾根の腹をまきながら森林地帯を行くが、ピッチもはかどらず1時30分 第二の壁に着く。天候が増々悪化したため、ここより一ピッチの所に荷物をデボすることになった。(7:50 B.H.出発 - 13:30 第二壁 - 14:00

デボ地 - 15:30 B H)

3月11日(日) 雪のち曇

ここでの天気予報は根室より網走地方の方がよく当るそうである。

起きると大雪! 「今日はゆるくないのでやめとけ」との管理人さんの言葉であったが、C I 確保のため出発する。里見台に着く頃から雪は小降りになるが風はいぜん強い。はい松に足をとられながらようやく第一の壁に着く。非常なアルバイトで腹が減る、きついラッセルをしいられるが第二の壁に向い、昨日のデボ地で昼食をとる。寒い! 天候は吹雪となり腰までのラッセルにビッチもあがらず、ルートを木の少ない岩稜直下をまきながら進む。ようやくのことで小さな沢を見つけ下る。少し硫黄の臭いがし屋根だけがかすかに見えた。泊場である。小屋は雪でうまり、雪をかき出すのに苦勞した。ここにテント一張、雪洞一つを作り C I とする。(7:30 B H 出発 - 9:25 里見台 - 10:00 ハン松原 - 11:05 第一の壁 - 12:30 デボ地 - 16:40 泊場(C I))

3月12日(月) 曇のち吹雪

今日は7名でデボ地の荷を上げ、梶本、唯岡の2名は偵察にでる。ボッカ班はC I から沢を下り岩稜直下まで直登し、その下を巻いて行きデボ地に着く。ここで昼食。寒い! 天候は非常に悪くなったため早速とC I に向う。偵察の方は羅臼岳の科尔までしか行けず帰ってくる。C II に上げる荷物を整理する。外はモーレッツな吹雪である。(9:00 C I 出発 - 10:30 デボ地着 - 13:00 C I 着)

3月13日(火) 晴のち吹雪

朝方ようやく天気がおちついてきたのでC II の食料をデボするため出発。泊場から科尔をねらって直登する。羅臼平はC I から少し登った所に広々とひろがっている。そこから夏道の屏風岩の下の沢すじをさけ、その上側を直登する。途中から又吹雪になりC II の食料を科尔にデボし急いでC I におりる。(7:00 C I 出発 - 10:55 コル 11:50 C I 着)

3月14日(水) 快晴

気象係の予報通り快晴! 羅臼岳の科尔に急ぐ。デボ地よりの展望は最高!

根室あたりまで流水が伸び、国後島の茶々岳もきれいに見える。荷を掘りおこし、最低コルよりウトロ側にまわって三峰に向う。最低コルは相当広い。

三峰、羅臼岳は風がきつくエビの尻尾等の造氷物が美しい。三峰を下りサシルイ岳のピーク直下の南面で風をさけながら昼食にする。サシルイ岳とオッカバケ岳のコルにCⅡを設営し5名(梶本、唯岡、南、香川、和田)が入る。他の4名は明日からのそれぞれの健闘を祈りながらCⅠにひきかえす。

サシルイ岳のピークからは硫黄岳が目の前に小さな頭をのぞかせていた。
(7:30 CⅠ出発 - 8:55 デポ地 - 12:30 CⅡ - 13:30 CⅡ出発 - 16:15 CⅠ着)

3月15日(木) ガス、時々雨と雪

CⅠ・CⅡともに沈澱。昨日積んだブロックも溶けるという暖かさであったが、日が落ちるとやはり冷える。

3月16日(金) 吹雪

9時の天気図をとてみると発達した低気圧が通過している。青函連絡船も止ってしまったようだ。CⅠ沈澱、CⅡは1463m峰まで南の斜面をトラバース、風は割合ゆるいが1463m峰のふもとにくると風が強くなり一人がつまづいた。風下から1463m峰へ小さなハイ松を越えて登る。途中から岩肌が現われる。頂上から首だけ出すのがやっとのことだ。これから先の稜線歩きはとても出来ないでひきかえすということで偵察に終わった。

3月17日(土)

CⅠは晴のち曇の天候で山本、永森の2名が羅臼岳アタックに向う。風が強く屏風岩下位から地吹雪みたいになって雪にたたきつけられるようで、コルまで来たが立っておれない状態で、さらに天候も悪化するようなので取付で断念しひきかえす。この日少し目を悪くした池田を山本と共に天候が少しよくなった昼頃BHに降す。CⅡは天候の状態が昨日よりもひどくガスと吹雪で沈澱。

3月18日(日)

CⅠは最終徹収日も近づいたしCⅡとの連絡がついていなかったのものでCⅡに向う。19時の気象予報ではまだオホーツク海に低気圧が停滞している。980

mb におとろえているがここでは少しも変らず吹きまくっている。10時出発するが稜線はとても歩けないので羅臼平からサシルイ岳直下をめがけて進む。しかし途中で断念。半島は海上に突出した地形だけに吹きっぱなしでしまつが悪い。一方C IIでは今日も吹雪とガスで停滞、明日で何とかせねばと気があせる。(10:00 C I 出発 - サシルイ岳直下 11:00 - C I 着 13:00)

3月19日(月)

どうやら朝のうちは天気はもちそうである。朝食もそこそこにC Iは活動を開始する。ようやくコルについたが天候が悪化してきた。雪が飛び視界がきかない。念のためザイルをつける。羅臼岳ピークへは取付から30m位登ると平坦な所に出る。そこより岩のごろごろしている所をぬけピークに立つ。急いでコルに下りC IIサポートに向う。コルからサシルイ岳手前で稜線が歩けず、そこから500m程下降しトラバースしてC IIに向うが完全に吹雪になってしまった。C IIを設営した場所をどうも錯覚したらしい。C IIを発見出来ないため断念して帰途につく。途中踏跡らしいものを発見したのもうC Iに帰っているかもしれないと思って帰りを急ぐ。しかしC Iは静かだ。C IIの連中が心配。一方C IIは、朝の内空模様が相当やわらいだのでとにかく11時までに硫黄岳に行きC IIを撤収しC Iに向う事にし、行動を開始する。香川、南、梶本が硫黄岳に向う。1463m峰を越え、やせた稜線を進む。途中同じ様な地形、岩がたくさんある。何と複雑な地形だろう。火山だからであろうか。何度も後をふり向いて地形を憶え地図を見ながら進むが、ガスがひどく視界がきかない。時々ガスの晴れ間を見て位置をたしかめて歩くがどうもおかしい、地図と合致しなくなったが、ガスの晴れ間より硫黄岳が見え大きな深い沢が前に走っており、一つ尾根をまちがっているのがわかったが、引き返してアタックする時間がなく残念ながら硫黄岳アタックを断念する。帰途につくが複雑な地形になやまされる。憶えていたと思っていたが、どちらを見ても同じ地形に見え判らない。コンパスまで何となく信用出来ない様な気分になってくる。やっと見憶えのある所に着く。少し休憩、ココアを飲む。C IIに11時半に着き早速昼食。

C IIを徹収し1時に出発。ガス、風がひどい。とても稜線のルートは取れ